

令和6年度 いのちの授業 事例集（幼稚園こども園）【環境】

掲載数

53

地区	学年	教科等	テーマ	内 容	参考事項（講師・教材等）
1 相模原市	年長	環境	命の儚さ、尊さ	<p>アゲハチョウの幼虫を飼育した。成長過程において死んでしまい、命の儚さを感じた子どもたち。</p> <p>様々な生き物が生きるために一生懸命生活していること、そのために命の儚さがあることについて考えられるよう、吉田遠志作、動物絵本シリーズの読み聞かせをした。生きていくために狩りをし、弱肉強食の世界があることや、動物も親が子どもを必死に守っていること等を知った。生き物が死んでしまうことについては「かわいそう」「命は1つだからね」と話をしていたが、自分たちの生活と照らし合わせて、動物も人間も家族を守ることを知り、命の尊さや家族の絆を考える機会となった。</p>	<p>&lt;絵本&gt; はじめてのかり まいご かりのけいこ かんちがい おもいで おみやげ ありづか</p>
2 横須賀市	幼複合	環境	食育・生命尊重	<ul style="list-style-type: none"> <li>・米やジャガイモ、トマト、ピーマン、キュウリ、サツマイモ、ダイコン、ブロッコリー、メロン等の作物を栽培・収穫する活動を通して、植物の生長のようすや四季の変化を知るとともに、収穫の喜びや自然の恵みへの感謝の気持ちを味わうことができた。</li> <li>・また、毎月「わくわくランチ会」を開催して、自分たちが育てた作物を自分たちで調理して試食することで、食への関心を高めることができた。</li> </ul>	
3 県央	幼複合	環境	チュウリップの球根植え（栽培）	<p>チュウリップの球根を一人1ヶずつ、クラスのプランターに植えた。</p> <p>昨年度に引き続き、小学1年生の担任の先生にご指導いただき、1年生のお兄さんお姉さん達に手伝ってもらいながら球根を植えた。</p> <p>春になって様々な色の花を咲かせてくれる日を楽しみに水やりなどを行い、成長を楽しみにしている。</p>	
4 県央	幼複合	環境	「夢ある未来プロジェクト」花の植栽	<p>厚木市農協の企画「夢ある未来プロジェクト」として地域の運営委員さんを通して花の苗を提供いただいた。</p> <p>園児と教師で園庭にある花壇を整備し、相談しながらビオラやパンジーなど、色とりどりの花の苗を花壇へと植える。水やりをしたり、花びらをとって花氷にしたり、花を身近に感じながら過ごす機会となっている。</p> <p>植物へのいたわり、いのちの大切さについても伝えながら、楽しみながら花のお世話をしている。</p>	

5	中	年長	環境	生き物を育てる	<p>これまで、年間を通して様々な虫の飼育をしてきた子どもたち。ある日、年長児がアマガエルを見つけ、「飼ってみたい」と言った。餌を調べてみると、餌は生きている虫と書かれていた。驚く子どもたちだったが、カエルのために、餌をつかまえては飼育ケースに入れていた。「かわいそうだ」と言う子や、「でも、そうしないとカエルが生きられないんだよ」「自分たちもそうじゃないか」と子どもたちなりに話し合う姿があった。その後も、アマガエルを大切に世話し、1週間後、元気なまま逃がすことができた。</p>	
6	中	年長	環境	蚕の飼育 ～カラー繭～	<p>卵から孵化し、毎日世話をして可愛がっていた蚕に、「身体に色を塗ると、繭の色が変わる」という話を聞いた何名かの子どもが、ペンで色を塗っていた。担任は、知りたいという気持ちを大事にしたいと見守りつつも、蚕に対して愛着があった為、可哀そうという思いから思わず涙ぐんでしまった。担任の様子に気づき、涙の理由を聞くと「色を塗っても、死ぬわけでないから実験したい」「色付きの繭が見たい」「自分だったら、嫌だ」「もしかしたら死んじゃうかも。死んだら可哀そう」などと、子ども同士で意見を出し合った。すでに1匹には色を塗ってしまったが、話し合いの結果、他は塗らないことにし、塗った蚕にも「ごめんね」と伝える姿があった。涙を見せたことは正解ではないかもしれないが、自然の不思議と共に、生命の大切さについても話し合うよい機会ともなった。</p>	
7	中	年少	環境	「ダンゴムシの飼育を通して」	<p>園庭でダンゴムシを発見したことをきっかけに、ダンゴムシ探しに夢中になった。家庭で飼育している友達の話から、園でも飼育してみることにした。飼育するための方法を図鑑を参考にしながら調べ、準備をした。ある時、湿らせた葉の裏にダンゴムシが集まることに気づいたが、水気のない所のダンゴムシは干からびて死んでしまった。そのため、毎日全体に霧吹きをするようにして心がけ、死なないように世話をしていった。落ち葉の裏に白くて小さいダンゴムシがたくさんいることに気づいた。ダンゴムシの絵本を見ると、それはダンゴムシの赤ちゃんであることが分かり、クラスみんなに知らせた。世話をしたことで、ダンゴムシが卵を産み、新たな生命が生まれてくるという貴重な体験ができた。</p>	
8	中	年長	環境	「虫の命について知る」	<p>園庭でバッタを探して捕まえてはバケツに入れ、たくさん捕まえることを楽しんだり、バッタなのかキリギリスなのか等、図鑑で調べてたりしていた。捕まえたバッタを逃がすが触りすぎて死んでしまうことがあったため、捕まえたバッタを見ながら、体の形、大きさ、色等についてどのようにになっているか投げかけ、虫にも小さな命があることに気づけるように関わっていった。バッタを観察するために飼育ケースに入れ保育室に置くことで事で他のクラスの友達も興味をもつきっかけになった。飼育ケースに入れただけでは死んでしまうことに気づき、図鑑で調べると土や草などで環境を作ると良いことが分かり、園庭から土や草を集めバッタのためのすみかを作った。何日か飼育をする中で草を交換し、霧吹きをしたりすることで外のすみかにいた時のような元気な虫の姿がよく見られ、さらに虫への愛着、大事にしようとする気持ちにつながったと思われる。</p>	

9	中	年長	環境	生命の誕生と育ち	5月から、孵化前の卵の状態の蚕を飼育し始めた。小さな卵に興味をもち、虫眼鏡を用いながら観察する様子が見られた。小さな卵を落とさないよう慎重に扱い、孵化する日を心待ちにしていた。孵化した後は、日々蚕を飼育する中で、蚕の成長や背中の筋、足の吸盤等の特徴にも気づき、絵本と本物の蚕を見比べながら、生きていくために必要な形状になっているということに気づいていた。餌の桑の葉がなくなると登園時や園外保育時に取って来る幼児、園内の桑の葉を探しに行く幼児などの姿が見られた。今回の経験から蚕の成長を身近に感じながら、最後まで愛着をもって世話する経験をすることができた。
10	中	年少	環境	植物の生長について	10月に一人ひとつずつチューリップの球根を植えた。子どもたちは、以前にフウセンカズラとアサガオの種を蒔いて育てていたため、チューリップも種であると思っていたようで初めて球根を見た時には、花になると聞いて驚いていた。球根を植える時には、「お布団だよ。」と言いながら丁寧に土を被せる姿も見られた。また、植えた球根に自分の名前の札を立てると、自分の球根という気持ちが強くなりさらに生長への期待が膨らんだ。毎朝、登園すると土の状態を見て水をあげたり、友達同士で土が湿っているかを確認したりしている。チューリップという身近な植物の生長に触れ、命があるものとして大切にしたいと思う心が育つ良い機会となった。
11	中	年長	環境	うさぎと触れ合う中での思いやりの芽生え。	年長児が交替でうさぎの世話をしている。飼育当番をしている友達に、「葉っぱは小さく切って、食べやすくしてあげてね」と伝える姿や、うさぎの体の毛が抜け始めると「お尻が白くなっているけど怪我をしちゃったのかな?」「毛がなくなっている」とうさぎのちょっとした変化に気づき、心配する声が聞かれた。子ども達の気づきをクラスの中でも話題にして、うさぎも人間と同じように生きていることを折に触れて話してきた。1年を通して、うさぎに餌をあげたり、小屋の掃除を友達とする中で、うさぎへの思いやりの気持ちが育っている。
12	中	年長	環境	アゲハチョウの羽化	年少時の12月に幼稚園の畑でみつけたアゲハチョウのさなぎを飼育ケースで飼い、いつチョウチョになるか観察しながら楽しみにしていた。「冬の寒い時にはチョウチョにならないよ」「まだかな」「何アゲハになるかな」と図鑑等を見ながら友達同士で話していた。進級後も引き続き観察を続けた。休み明けにチョウチョになっていることに気づいた子ども達は喜び、大興奮していた。「早く出してあげよう」と言うA児。「みんなでバイバイしたい」と言うB児。C児が「花の蜜を吸わないと死んじゃうんだよ」とつぶやくと、それを聞いたD児が園庭にある花を摘み、飼育ケースに入れ、「育てたいな」と言った。C児は、「広いところで飛ばせてあげたいな。こんな狭いところだとかわいそうだよ」とD児に話す。D児は、狭いケースで羽を動かすチョウチョをしばらく見て考え、「そうだよね」と言い、周りにいた幼児も納得した様子が見られた。ふたを開け飼育ケースから飛び立つのを固唾を飲んで待つがなかなかチョウチョが出ない。やっとケースから飛び立ち、子ども達も「元気でね」と無事に空高く飛ぶまで見送った。数日後、園庭にアゲハチョウが飛んでいると「あのチョウチョかな?」と子ども同士で話す姿が見られた。広いところで自由に飛び回るチョウチョを大切に思う気持ちをもった。

13	中	幼複合	環境	生き物調査隊 「生き物の里」 へ出かけて	<p>地域にある「生き物の里」において、親子で自然観察をする。幼稚園からほど近い場所にある、田んぼや池、水辺には、多くの生き物がいることを知り、生き物と共存していくことのきっかけとして大切な活動である。</p> <p>講師から、この水辺は、大勢の人の手によって守られていて、それが人の命を守ることに繋がると知る。この環境を守っていかないと「生き物が生きていけないこと」など、分かりやすく話してくださり、身近な自然を通じて、子どもたちは、生き物の命が守られ、地域の自然環境の大切さについても、学ぶことができた。</p>	
14	中	幼複合	環境	防災教育 幼年消防クラブ 「煙体験」 「花火教室」	<p>1 煙体験 火災に遭遇し、煙の中を逃げる時の方法について、実際に体験する。室内に煙を焚き、避難方法を体験する。また、避難方法に加え、誘導灯や住宅用火災報知器について知る。</p> <p>2 花火教室 子どもが安全に花火を楽しめるように、正しい火の扱い方や注意点について学ぶ。</p>	
15	中	年長	環境	かたつむりの 世話	<p>雨の日に傘にかたつむりを乗せて登園する幼児がいた。幼稚園で飼うために傘に虫かごを近づけて、「もう少し」と虫かごに移動する様子をじっと眺める。図鑑でどのような環境にしたらいいのかや何を食べるのかを調べ、園庭で枝を探したり、家から野菜を持ってきたりするなどかたつむりが生きるための環境作りを行っていた。しかし数日経つと他の遊びに興味向き、世話をする姿が減ってきた。教師が「かたつむりさん、元気かな」と呟くと、「お世話できていなかったね」「飼っていたら死んじゃうかもしれないから、逃がしてあげよう」と命があることを意識する姿が見られた。</p>	
16	中	年少	環境	ツバメの雛	<p>保育室の窓から見える位置に鳥の巣ができた。一人の女兒が見つめて、親鳥がいるのを毎日観察していた。ある時、女兒が雛が生まれたことに気づき、「赤ちゃんいるよ」と指をさして教えてくれた。他の子ども達も一緒に観察し、4羽いることに気が付いた。教師が「ご飯はどうしているんだろうね」などと子ども達がさらに興味をもつような言葉を掛けると、自分の持っている図鑑を見て調べたり、「お母さんが持ってくるんだよ」と予想して話したりしていた。翌日に親鳥が来て雛の口に餌を入れている様子を見た子が「お母さんが食べ物を探しにいくんだ」「だからずっとここにいてもお腹すかないね」「○○くん(弟)と一緒にだ」と話す。興味をもっていた女兒が教師と一緒にカラーポリ袋と新聞紙、画用紙を使ってツバメや鳥の巣を作り、ごっこ遊びをしていた。作ったツバメを大切に抱きかかえていたり、飛んでいる様子を再現したりしている姿からツバメを大切に思う気持ちが表れていた。</p>	

17	中	年長	環境	野菜苗の栽培を通して	<p>一人一人夏野菜の苗を植えた。自分で育てたい野菜を選び、JAの方から直接受け取ったことで自分の苗に愛着をもって世話をしていた。水やりをすることで下を向いていた葉がピンと上を向いたり、葉が増えていったりと、世話をすることで、言葉をもたない植物にも命があることを実感していった。実ができてくると、鳥に食べられてしまうことがあった。鳥よけのテープをつけるなど、野菜を守る方法を考えながらも、鳥も生きるために食べているということに気付く姿もあり、幼児なりに命の連鎖について考える機会となった。また、日頃の食事も残さず食べようとする意識をよりもつようになった。</p>
18	中	年少	環境	チューリップの栽培を通して	<p>チューリップの球根を植え、育てることにした。一人一人自分のを植えたことで愛着をもち、進んで水やりを行う姿が見られていた。日が経つにつれチューリップに水やりを忘れ、遊びに行ってしまう幼児の姿が増えたため、活動の中でチューリップも皆と一緒に命があることを自分たちの立場に置き換えて考えられるように話しをした。その後は意識をもって水やりを行ったり、生長を促す言葉を掛けたりする姿が見られた。また12月下旬頃から、少しずつ芽が出始めると生長したことを喜び、より生長を楽しみにする姿や園を休んでいる友達のチューリップにも気にかけて、水やりを行う姿に繋がった。</p>
19	中	年長	環境	ナスの栽培を通して	<p>夏野菜の栽培でナスを育てていたA児がナスの葉が枯れてきた事に気づき、同じようにナスを育てている子に知らせた。「何で元気がないのかな」「水が足りないのかな」と話をして、毎日水を多めに上げるなどするが成果が見られず、葉に黒い斑点があることにも気付いた。疑問に思い図鑑やタブレットなどで調べると、病気や栄養不足が原因かもしれないとわかった。皆で相談し、肥料をあげ病気の葉を全て取ることにした。葉をとりながら「元気になってね」など声をかけていた。その後、引き続き世話をしていくと「新しい葉っぱが出てきたよ」「蕾が出来たよ」と元気になっていく様子に喜ぶ声が聞かれた。今回の経験で自然の命の力強さや植物にも命があり大切にしていきたいという心が育ったと感じた。</p>
20	中	年少	環境	コガネムシの幼虫の世話を通して	<p>A児が園庭で見つけたコガネムシの幼虫を飼育しようとしていた。保育教諭が生き物にはそれぞれ合った環境があることを知らせながら一緒に調べて、飼育環境を整えた。その後、B児も園庭で同じ幼虫を見つけた。飼育ケースに入れ様子を見た後、「発見した場所の近くに置くことで、幼虫が安心する」と考え、飼育ケースを園庭に置いた。しかし、翌日に死んでしまい保育教諭に知らせに来る。保育教諭が、何故死んでしまったのか話題にすると、A児も興味をもち、飼育環境について一緒に考えていた。翌日から、A児は世話をしていたコガネムシの幼虫を頻りに観察し、B児も一緒に飼育環境を整えていた。自分たちと同じように他の生き物にも住みやすい環境があり、大切な命が宿っていることに気付く貴重な経験となった。</p>

21	中	年長	環境	アゲハ蝶を幼虫から育ててみたら	<p>昨年の経験から、アゲハ蝶の幼虫がどこにいるか覚えていて金柑の木で見つけ飼うことになる。どのように飼育していくとよいのか、図鑑を見てじっくり調べる姿があった。毎日様子を見て、大きくなっていたり、色の変化に気付き、友達や保育教諭に伝えていた。幼虫が蝶になった時にはクラスみんなで喜ぶ姿があった。蝶をこのまま飼うことから、クラスの皆で話し合いをする。卵から育てた蛹もいるため「飼いたい」という意見や「飼育ケースが狭くて羽が折れちゃいそう」「逃がしたら、お母さんやお父さんに会えるかも」などそれぞれが意見を出し合った。「広い場所で飛べたら気持ちよさそう」という、蝶の気持ちになって考える意見もでて、皆が納得をしたことから蝶を逃がすことになる。生き物を育て飼うから、成長に感動したり、生き物に対する優しさや生命を大切にすることが育まれた。</p>	
22	中	年少	環境	カブトムシを飼育し、命の大切さを知る	<p>カブトムシをクラスで育て、図鑑を見ながら飼育の仕方を調べ観察していた。餌のゼリーが減っていることや、土が乾いていることに気付き世話をしていたが、触れ方や力の加減が分からず、強く掴んだり虫かごをゆすったりする姿もあった。数日後、カブトムシが動かなく死んでしまったことを発見し、皆ショックを受ける。そこで「カブトムシがかわいそう」「強く触ったらダメだった」と言いながら、死んでしまったカブトムシをどうしていくのか話し合う。自分たちの飼い方や触り方についてを振り返り、「お墓を作りたい」「踏まれない静かな場所にしたい」という事から、自分達の目にふれる玄関の近くに場所にお墓を作り、その後も様子を見守る姿があった。カブトムシの飼育を通して、命あるものを飼うことに重要な飼育の仕方や命の大切さについて学んだ。</p>	
23	中	年少	環境	あっ！けんかしているよ	<p>カブトムシ講座でカブトムシを数匹頂き、クラスで飼うことになった。小さなケースに2、3匹入っていて狭そうであった。ある時、その中の2匹がけんかを始めた。「あっ！けんかしている！」「つのが折れちゃうよ」「かわいそう」と観察していた。担任が「けんかをやめる為にはどうしたらいいのかな？」と園児に問いかけると、「大きい(ケース)がいいのかな？」「(2匹を)離せばいいんだよね」と違うケースを探し始めた。担任が別のケースを持ってくると「これで死ななくなるね。よかった！」と安心した様子になった。大切なカブトムシ。ずっと生きてほしい思いが強いと実感した。</p>	

24	中	年中	環境 「ひつつき虫」は、虫か虫じゃないか？	<p>年中組で、虫取り網に付いている通称「ひつつき虫」に注目した二人が「これは虫だ！」「虫じゃない！」と言い合いをはじめた。周りの子どもたちも興味を示して、個々に意見を言い、ビニール袋に入れるなどして観察が始まる。「いつの間に服についているから虫だ」「刺さっているだけだ」「虫の足と触覚に似ている」等々、激論が交わされるが虫説が優勢。次の日に園周辺に「ひつつき虫」を探しに行こうということになり、クラス全体で出かけた。ひつつき虫と他にも気になる物があり、採取したものを保育室で観察し、数種類の図鑑を用いて調べた。昆虫図鑑には載っていないことがわかり、植物図鑑に同じものを見つけて正式名称が判明した。虫眼鏡で見ると細部まで見えることから、これがなぜくっつくのか、特徴や性質にも関心が広がり、一緒に拾ってきた別の実も調べ始める。「皮をむくと中身が白い」「手がベトベトした」「コロコロして卵みたい」との声。図鑑に載っていて、「洗剤が作れる」との図説に興味津々になった。水を入れて試すと泡立ったので、ままごとの皿を洗うなど活動が展開した。いのちを考える直接的なエピソードとは少し違うかもしれないが、身近な植物か動物を通して「虫か虫じゃないか」という疑問から始まり、主体的に活動を進める子どもたちの姿は、いのちを考える学びにつながる体験となった。</p>	
25	県西	年長	飼育物を通して、命について考える	<p>地域の方がマジックショーを開催してくれた。マジックの中で使用された『金魚』5匹を「よかったら、どうぞ飼ってください。」とお願いされた。現在少し大きめの2匹の金魚を飼っているのので、隣に小さい水槽を準備し、金魚の赤ちゃんを飼育し始めた。「どうやって飼育していこうか？」「誰がえさをあげる？」「水槽が汚れたらどうする？」と話し合いをしていた矢先、元気のなかった3匹の金魚が水槽の中で死んでしまった。死んでしまった金魚について話し合いをした。「病気だったのかな？」「水が汚れていたからかな？」と理由を考えた。死んでしまったことで、悲しいけれど、「お墓に埋めてあげて、皆が踏まないように印(看板)を作ろう！」と看板をつくり、お墓の前に置いてあげた。まだ生きている2匹の金魚をもっと大切に育てていこう！という思いに繋がって、一人一人が責任をもって飼育していく気持ちがもてたようだった。</p>	
26	県西	年少	栽培物を通して、命について考える	<p>6月にハツカダイコンの種を一人一鉢ペットボトルでつくった鉢に植えた。すくすくと葉が育ち、一つ一つのハツカダイコンが大きく育つように間引きをした。毎日、『大きくな～れ』と声を掛けたり土が乾いたら水をあげたりして、実が大きく育つことを楽しみにしていた。葉が育っていくうちに、葉が虫に食べられてしまい始めたので、「どうしようか？」と考え嫌な匂いのお酢を撒いてみたが、効果があまり見られなかった。実の方は育っていることを期待したが、それも思っていたような育ちは見られなかった。“どうして育たなかったのか”と疑問をもったことは、幼児自身の次への興味関心や意欲、教師自身が省察につながったのではないかと。また、自分の鉢に愛着をもち責任をもって大切に育てていこうとする心持ちは十分に育っていたと思う。</p>	

27	県西	年中	環境	小さな生き物にも大切な命があると気付いた事例	<p>生き物を探し、捕まえることが大好きな子どもたち。毎日のように「畑に行きたい！」と思いを伝え、バッタやカニを捕まえることを楽しんでいる。しかし、捕まえた生き物を靴箱の上に放置し、お世話をしない幼児が多い。そこで、小さな生き物にも命があることに気付けるよう、「ご飯がないと死んじゃうよ」と声を掛けると、「何を食べるのかな？」と図鑑を読んだり、その都度給食のご飯をあげたりしてお世話をしていた。しかし、最適な環境ではなかったことで、衰弱する生き物が多く、幼稚園に置いておくとうなるのか考える時間を設けると、「そのままだと可哀想だね」「じゃあ逃がしてあげよう！」と近くの川に返し、生き物にも大切な命があることを知る機会になったようだ。小さくても命があることを教師も自覚し、大切にしようとする気持ちをもてるような支援をしていきたいと感じた。</p>	neo図鑑やタブレットを活用し、生き物に必要な物を調べられるような環境を用意した。
28	県西	年中	環境	虫を育てるために考える	<p>最初は、虫を捕まえてかごに入れるだけで楽しんでいた年中児。しかし、それだけではすぐに死んでしまうことに気づき、虫かごの中の環境を工夫することになった。思い思いの考えで飼育していたが、中々長生きできずに困っていると、年長児から「図鑑を見ると良いよ」と一言。読んでいくうちに何が良くて何が間違えていたのか確認ができた。その日から「バッタは〇〇はやめて〇〇にしよう」「〇〇は～」と子ども同士で虫の好きな環境を話し合い育てるようになった。次第に長生きするようになり、「やっぱり〇〇はこれが良いんだ」と納得していた。虫の「命」とおして“相手のことを考え行動すること”“相手を知ること”等の大切さを実感する機会となった。</p>	
29	県西	幼複合	環境	ツマグロヒョウモンの飼育を通して	<p>ある日、パンジーのプランターにツマグロヒョウモンの幼虫があることが分かり、飼育を始めた。毎日観察していく中で、サナギの光り方が違うこと、蝶の模様が違うこと、外側と内側の羽の色が違うことを発見し、その度に友達に伝え合う様子があった。蝶になったとき、年長クラスでは「かわいそうだから逃がしてあげよう」「まだ飼育ケースの中で見ていたい」と意見が割れた。長い時間の話し合いの中、「写真を撮っておいたらいつでも見られるから、寂しくないよ」という一言で、クラス全員の意見が一致した。記念写真を撮ってから、外に出してみるが、なかなか飛ばない。「みんなと別れたくないのかな」と壁に逃がし、「バイバ～イ！」と手を振って見送った。</p>	昆虫図鑑
30	県西	幼複合	環境	カメの飼育を通して	<p>二匹のカメを飼育している。生き物の動きを見たり、餌をあげたりすることを楽しみにしている幼児もいる。第1学期、まだ話ができない年少児が興味を示していた。「餌あげてみようか？」と声を掛けると首を縦に振った。毎日の日課となり、そこから言葉を発するきっかけをつくるようにし、第2学期になると自分から「エサ」と少し言えるようになった。カメを持てるようになり、戸外遊びと一緒に連れまわすようになった。それがきっかけとなり、生活発表会ではカメと一緒に出演することができた。11月になると、カメの動きが鈍く心配の声も聞かれた。「寒いから動かないんじゃない？お部屋に入れてあげよう」と戸外から運んでくれる幼児もいた。</p>	

31	県西	年少	環境	食育「食べる喜びを味わう」	春、クラスで夏野菜の栽培を始めた。中でも1番収穫を楽しみにしていたポップコーンを収穫目前にカラスに食べられてしまい、1本しか残らなかった。子どもたちはその1本をどうするか何度も『ひよこ会議』（話し合い）をし、ついにポップコーンパーティーをすることが決まった。ポップコーンをつくるために必要な材料も調べ、近くのスーパーへ皆で買い物に行き、調理をする様子も台所で見学した。ポップコーンがはじける音や匂いなど、食べる前から五感をフルに働かせ、目を輝かせている姿からは学びへとつながる経験になっていることが感じ取れた。初めて育てた野菜を食べる事の喜びを味わった子どもたちは、次に何を食べようか計画している。	
32	県西	年長	環境	いのちを身近に感じる「カメの世話を通して」	毎日、カメの水替えやエサやりをしている年長児が「りぼんちゃん、ごはん食べてない。」「あんまり、動かないね。」「でも、うんちをたくさんしてる!」と気付いた。元気がない様子を心配して友達に知らせに行くと、「冬眠するんじゃない?」ということになり、小田原アリーナへ落ち葉を集めに行くことにした。年少だった頃に、年長児がやっていたことが記憶に残っていたのだろう。カメのリボンちゃんが幼稚園にやってきて20年近く経つが、こうして毎年冬眠に向けた準備が引き継がれている。”いのち”の尊さは、直接的な言葉で教えなくても、身近な生き物の飼育を通して、直接触れ、実体験から学んでいる。	
33	県西	幼複合	環境	「カナヘビちゃん、元気だね」	一匹のカナヘビを発見し、虫カゴに入れてクラスで観察するうちに「逃がしてあげようよ」という声が聞かれるようになった。「この子、赤ちゃんかな?」「パパとママが心配して探しているかもしれない」「パパとママに会いたいかも」と、カナヘビの気持ちを考え相談していくうちに「絶対に逃がしたくない」「持って帰る」と言っていた子どもたちの心も動き、最終的には「カナヘビちゃん、元気だね」と、草木の多い場所に逃がしてあげることとなった。自分たちよりも小さな生き物に触れ、愛着をもち観察をする中で、カナヘビの気持ちを考えたり寄り添ったりと、普段は見られない子どもたちの優しさに気付くことができた。	
34	県西	年長	環境	生き物の飼い方について考える	Aはバッタを捕まえた後、飼育方法として草や水が必要なことを調べた。草はバッタを捕まえた周辺にあったもの、水はプリンカップに注いだものを用意し、虫かごの中に入れた。次の日、登園してきたAはバッタが死んでしまっていることに気づき、「先生、バッタが水に入っちゃってる。」と教師に知らせた。「本当だ。水が多かったのかな?草の入れ方が良くなかったのかな?」という教師の言葉を聞き、Aはプリンカップを浅いものに変えてみることにした。水を入れるカップをペットボトルキャップに変えたり、長めの草を入れたりしてバッタの飼育環境を工夫して作る事ができた。	昆虫のかいかた、そだてかた 三枝博幸 文 松原巖樹 絵
35	県西	年少	環境	小さな生き物が冬を越すために	11月下旬、虫取りをしようとした幼児が、園庭にテントウムシやチョウがいないことに気づいた。疑問をもった幼児が担任とともに図鑑を見ると、冬は土や木の中に卵を産んで、卵が冬を越すことが載っていた。小さな生き物が命をどのようにして次世代につないでいくのかを知る、第一歩となった。	

36	県西	年長	環境	「カタツムリの生態」	<p>学級の皆でかたつむりを見つけに出かけた。塀で大きなかたつむりを6匹見つけ、保育室に持ち帰り学級でかたつむりを飼育することにした。図鑑で餌は何を食べるのかを調べ、かたつむりが飼育ケースで暮らせるように環境を準備をした。かたつむりは貝や卵の殻を食べることを知り、卵の殻を家から持ち寄ったり、園で栽培しているサニーレタスを入れたり世話をした。子どもたちは、かたつむりがどうやって食べるのか飼育ケースを覗き込み、口の動かし方をじっと見ていた。人参は一部がへこみ食べた跡がよく分かった。きゅうりは固い皮だけ残っていて、柔らかいところだけ食べているなど、かたつむりの食について知ったり、人参を食べると赤い糞になることを発見し、食べ物と糞の関係性にも興味関心を深めていった。</p>	
37	県西	年長	環境	カメの世話を通して「元気に出てきてね」	<p>12月のある朝、飼育していたカメが、目を閉じて手と足を広げて水の中で動かなくなっているのを発見した。子どもたちは「自分たちの世話の仕方がいけなかったのではないかと」と、自分たちのせいで死んでしまったのではないかと考えていた。「可哀そうだから、お墓を作ってあげよう」と話し合っていると、カメの足が動いたことに気付いた。子どもたちはカメが冬眠していたことが分かったと、「安心して眠れるようにするにはどうしたらいいのだろうか？」とタブレットでカメの冬眠の環境を調べた。必要な物が分かったと、落ち葉や水を友達と力を合わせて入れ、「春になったら元気に出てきてね」と蓋をしていた。その後も、水の量が減っていないかを確認し、世話をする姿が見られた。</p>	
38	県西	年長	環境	朝顔、卒園までに咲いてほしいな	<p>色水やままごと等で自由に使用できるよう、園庭に朝顔を植えていた。花がすべて咲き終えて、種をとることを楽しんでいた子どもたち。とった種を土に植えて、育てたいという気持ちが生まれてきた。</p> <p>砂場の土に種を入れて育てようとしていたが、それで育つか疑問に感じた子供たちが、タブレットで調べて、必要な材料や適した場所などを知り、再度栽培を始めていた。調べたことを共有し、毎日水をあげる約束をしたり、日が当たっているかを確認し合ったりして、毎日大事に栽培していた。種を植える時期、花が咲く時期も調べて知っているが、「ちょっと早く、私たちが卒園するまでに咲かないかな」と楽しみにしていた。</p>	
39	県西	年少	環境	青虫から羽化になるまでの楽しみ	<p>入園当初、園庭のプランターや花壇のところで見つけた青虫に夢中になった年少組。その青虫の出会いが毎日の日課となり、園庭中の青虫を探しに出かけることになった。毎日見つけては捕まえた青虫が何を食べるのか、どのように大きくなっていくのか、毎日世話をしながら気づいたことを伝え合うようになった。数匹が羽化する様子を見ることができたことで青虫の種類が違うことにも興味が広がり、どの青虫がどの蝶々になるのかなどワクワクした気持ちで青虫を見つめるようになった。40匹近く育てた青虫がままごとコーナーの棚や段ボールの内側などにさなぎを作ってしまったことにも「かわいい」「大切にしたい」という気持ちの中で見つめていて、冬になった今でも羽化することを心待ちにしている。毎日世話をすることで青虫への愛着が深まった。</p>	

40	県西	年長	環境 ウスバキトンボ 捕りを通して	<p>6月後半から、園舎裏でトンボが飛んでいることに興味をもち、虫かごや網を持って捕りに出かけた。最初は、“たくさん捕まえない” “捕まえることが楽しい” という思いでトンボをたくさん捕まえていた。捕まえたトンボは、狭い虫かごの中にたくさん入れていた。また、トンボを捕まえるときや、捕まえた後に羽を強くつかんでしまっていたので、逃がすときに羽が弱って跳べなくなってしまうたり、死んでしまったりした。子どもたちは「飛べなくて、かわいそう」「いっぱい入れちゃったからかな」「入れ物を変えたらいいんじゃない?」「もっと大きいかごはどう?」などと、どうしたらいいのか考えることにした。</p> <p>その後、子どもたちはトンボを捕りに行くときには、大きな虫かごや通気性のある虫かごにしたり、トンボを持つときには羽を優しく持つことを意識したりと、トンボの死を通して命について考えるきっかけとなった。</p>	
41	県西	年少	環境 カエルさん大好き	<p>カエルが大好きなA児。園庭で遊んでいると、カエルがいた。「Aが捕まえる」と素手でつかんで飼育ケースに入れた。しかし、カエルが大好きなので、「触ってもいい?」と飼育ケースから出して、触り始めた。「お腹がプニプニしている」と嬉しそうに言うA児だった。その日、飼育ケースにカエルを入れて家に持ち帰った。</p> <p>次の日、空の飼育ケースを持って登園してきたA児。少し寂しそうな表情だった。「どうしたの?」と声を掛けると、「カエルさんお外にバイバイしたの」と言って泣き出した。保護者に詳しく話を聞くと、カエルが死んでしまうので家の外に逃がしたのだということだった。「カエルさんとバイバイできたんだね。また会えるといいね」A児は泣きながらもうなずいた。きっとカエルとお別れする寂しさを感じながらも、死んでしまったらかわいそうだという気持ちもあり、葛藤していたのだろう。</p> <p>それからは、カエルを見つけるとA児は「カエルさんと遊んだら逃がしてあげる」と言ってしばらく触ってから逃がすようになった。</p> <p>数日後、登園してきたA児と保護者からこんな話を聞いた。「カエルさんがお家のお庭にいて逃げないでAちゃんの方を見てたの!」「カエルさんがありがとうって言いに来てくれたんだね」嬉しそうなA児だった。</p>	
42	県西	年中	環境 「はーとかまくん ありがとう」	<p>園庭で見つけたオオカマキリ(1匹)の飼育を始めた。大きなカマキリに喜び、夢中になって“見る・触れる・餌を探す”子どもたちだった。また「はーとかまくん」と名前をつけて話しかけるなど愛着をもち、大切に育てる姿が見られ始めた。餌を探すために遊び時間をすべて費やすほどの姿も見られ、“カマキリのために”という気持ちをもって関わっていた。子どもたちに見守られ3回の産卵をし、冬休み前に赤ちゃんが産まれると、数人の子もたちが家庭へ持ち帰り、家庭での飼育が始まる。1月上旬、4回目の産卵後死んでしまった。大事に飼育していたカマキリに「ありがとう」と手を合わせ感謝を伝える姿が見られた。その後も家庭で飼育している子どもから「赤ちゃんを産んでくれたから大きく育てたい」や「脱皮したよ」という報告を聞くことや、残りの3つの卵から赤ちゃんが産まれるのを楽しみにしている。生きた餌が必要なこと、卵を産むことなど多くのことを学び、命のつながりや生きようとする力の素晴らしさを感じていた。</p>	<p>おおい自然園長にカマキリの写真を見ていただく</p>

43	県西	幼複合	環境 おたまじゃくしとの出会いから別れまで。	<p>6月の探検活動で川原へ行った際おたまじゃくしに出会う。「飼ってみたい！」という思いから図鑑やタブレットを使い生態を調べた。「足が生えてくると水の中で息ができなくなるから丘を作ろう」「パンや麺を食べるって書いてある」など意見を出し合いおたまじゃくしに適した環境作りを始める。「早くカエルにならないかな…」と毎日愛着をもって育てることを楽しんでいた。6月半ば「カエルさんが増えた！」と喜ぶ子どもたち。しかし数日後カエルが日に日に死んでいることに気が付いたため、どうして死んだのか・どうすればよかったのかなど全体で話し合う場を設けていく。「生きている虫を食べるって図鑑に載ってた」という話から「捕まえた川に戻す?」「いいね! そうしたら家族にも会えるしカエルさんも喜ぶかも!」とカエルを思った温かい言葉があがり、川原へかえしに行くことが決まった。「今までありがとう」「またどこかで会えたらいいね」と思いを口にしながらカエルを逃がし飼育活動が終了した。おたまじゃくしの飼育を通し、不思議に思ったことを伝え合い自分たちで調べるだけでなく命の大切さ・尊さ・思いやりの気持ち・責任感が育まれた。</p>	
44	県西	年少	「小さな生き物への気持ちが変化したA児の事例」	<p>虫取りが大好きなA児。命があることは分かりながらも大切にすることをなかなかもてない姿に、教師は小さな生き物の命の重さを知ってほしいという願いをもって関わっていました。</p> <p>保育室にいたトンボを見つけて捕まえたA児。以前虫かごに入れたまま死んでしまった経験から「みんなに見せたら逃がしてあげようね」と約束をしましたが「やっぱり逃がしたくない!」と虫かごを眺めていました。</p> <p>教師はクラス全体にどうするか投げかけました。</p> <p>B児「狭いからお空に行きたいんじゃない?」 A児「大きい虫かごを作ってあげたらいいじゃん」 C児「お母さんに会いたいんじゃない?」 A児「いっぱい捕まえてくればさみしくないもん」やり取りを繰り返していると D児「あ!羽一つ取れているよ」と気付きました。 A児「・・・逃がしてあげる」</p> <p>花壇で虫かごを開けますが、なかなか跳べないトンボ。みんなのがんばれコールが始まりました。やっと虫かごから出たトンボはA児の肩に止まりました。</p> <p>「僕のこと好きなのかな」と優しい眼差しで見つめるA児。しばらくしてトンボは空に飛んでいきました。</p> <p>次の日虫取りをしながら、 「ずっと捕まえてたら羽がとれちゃうから逃がそう」 「トンボって僕のこと大好きなんだよ」と得意げに話すA児。生き物の命を大切にすることを芽生えた経験となりました。</p>	

45	県西	年少	環境	うさぎの気持ち	<p>4月、園で飼っていた2匹のうさぎのうち1匹が死んだ。11月になり、ふと「ここあちゃん(うさぎ)はお空に行っちゃったんだよね」とA児。「一人だとゆきちゃん(うさぎ)寂しそう」とB児。「友達がいたら寂しくないんじゃない?」と言いA児はトイレットペーパーの芯を使ってうさぎを作り始める。その姿を見て「いっぱいいる方が喜ぶかも」と周りにいた子ども達も作り始める。作ったうさぎをうさぎ小屋の中に置きに行く。「ゆきちゃん嬉しそう」「笑ってるよ」と自分達が作った事で喜んでいると思われるうさぎを見て嬉しそうにする子ども達。その後も「ご飯をあげたら喜んでくれるかな?」と年長児のうさぎ当番と一緒に餌をあげる姿があった。うさぎの気持ちを想像し、自分達ができる事について考えた事例。</p>	
46	県西	年少	環境	オタマジャクシの飼育	<p>6月の園外保育でおたまじゃくしを見つけた。「これ何?」「真っ黒だね」と存在を不思議に思う一方、「手と足が生えてくるよ」「緑色になってカエルになるんだよ」と、知っている子が友達に教える姿もあった。「葉っぱを食べるよ」「これあげよう!」と日々観察し成長を見守った。カエルに成長すると、「このままだとご飯が無くて死んじゃうんだよ」「水があるところだと生きていける!」と、幼稚園の中でカエルが生活できる場所を探して逃がすことに。「一人だと寂しいから同じところでばいばいした方がいい」と、育ったカエルたちを幼稚園の池に逃がし、「元気でね」と見送った。カエルの立場になって考えたり命を大切にしようとした事例。</p>	
47	県西	年長	環境	マリーゴールド栽培とTシャツ染め体験	<p>箱根湿生花園の職員に来園してもらい、マリーゴールドの種植えを行った。種から芽が出て少しずつ成長する様子を毎日観察し、教えてもらったやり方で土が乾いたら霧吹きで水をあげることが日課となっていた。絵を描いたり、観察したりして3週間後本葉が出て3cm程成長した所でピンセットを使いポットに植え替えた。雨水を利用し水あげをして花が咲くのを心待ちにした。花が咲き、見て楽しむだけでなく、色水遊びやままごとに使い自分たちが育てた花を楽しんだ。9月にはTシャツ染めを行い、きれいな黄色に染まった。マリーゴールドの花が枯れた所で種とりをして、引き継ぐことにした。その花で染めたマリーゴールドTシャツは今でも子ども達が行事で着ており、心にはずっと思い出として</p>	
48	県西	年長	環境	マスつかみ	<p>自園では毎年溪流でマスつかみを行っている。魚の生態を知り、命に触れる機会となっている。今年も川の上流に行き、冷たい水温の中、マスを追い込みながら手で掴み、何匹も捕獲した。その後、すぐに捌いてもらい、持ち帰った。今まで息をしていたマスが包丁でお腹を裂かれ、血が出る様子を目の前で見る経験はほとんどなかった子どもたちは衝撃で言葉を失っていたり、「わー」と声を出していたり、「すごいね」と感心していたりと様々な様子が見られた。家に持ち帰りいろいろな調理方法で食べたことを教えてくれた。生と死を間近で見えて感じる心が揺さぶられる体験となった。</p>	

49	県西	年長	環境 ビオトープの設置とメダカの飼育	<p>春にはオタマジャクシ、夏や秋には昆虫採集や飼育など、日頃から生き物への興味や関心がある年長児。9月、園内の自然環境の見直しをする中で、より身近に自然と関わるができるように、園舎中庭にプラスチック製の簡易ビオトープを設置し、メダカの飼育をはじめた。12月のある朝、ビオトープの水が凍っていることをみつけ、大きく四角い形状に張った氷に大興奮の子どもたち。氷に触れ、割ったり、踏んだりして楽しんでた。しかし、次の瞬間「メダカが大変！」と水温の低さで弱っているメダカを見つけた。メダカを救出しようと水中に手を入れるが、その冷たさに数秒しか手を入れることができずにいた。「それならお湯を持ってこよう」と、メダカを救うために様々な方法を考え、必死になる子どもの姿があった。「こんな冷たいところに住めないよ」と、まるでメダカの気持ちを代弁するように、かじかんだ手の冷たさを実感していた。その後、全てのメダカを室内にある水槽に移し替え、生き物を飼うために適切な環境があることを学んだ。</p>	
50	県西	年長	環境 生き物の命	<p>園の周りは自然があふれ、園庭に出るといろいろな生き物に触れあえる環境がある。秋になると園庭や隣接している小学校の校庭にたくさんのトンボが飛び、虫取り網を持って追いかけていた。また、草むらや畑でカマキリやトカゲを見つけると、数人で捕まえる作戦を立て「そっちに行ったら捕まえてね。」「OK、任せて。」「ふたを開けて待ってるね」と役割を決めて夢中になっていた。捕まえると虫かごや飼育ケースに入れて保育室に置き、登園してくると園庭に餌をとりに行ったり掌にのせたりして遊び、思ったことを友達と伝え合いながら、触れ合うことを楽しんでた。毎日のように虫をとり、保育室や廊下、玄関等、いろいろな場所に飼育ケースや虫が入った容器が徐々に増えていった。捕まえることが楽しく、その後の世話や関心が薄れ、飼育ケースだけがどんどん増え、中には死んでしまいそのまま放置されているものもあった。そこで保育室に生き物コーナーの場所を用意し、命についてみんなで考える機会を設けた。「飼育ケースはここに置くと忘れないよね。」「ずっとこの狭いお家の中だったら虫も嫌だよね。」「かわいそうだよ」「帰る時には逃がしてあげよう」等、それぞれに思ったことを伝えていた。世話ができず、死なせてしまった命もあったが、そこから考えたり学んだりしたことも多く、生きていくものには全て命があり、大切にしなければいけないことを学ぶ機会となった。</p>	
51	県西	幼複合	環境 初めての生き物	<p>園庭に小さなビオトープがある。卒園児はおたまじゃくしが生まれたことを知っており、バケツに取ってくれたのがきっかけとなった。子ども達がバケツに入った生き物を見つける。「知っている、見たことある！」と言うものの、名前も知らない子もいた。読み聞かせで絵本や図鑑を使って名前を知るところから始まった。始めはおたまじゃくしを眺めるだけであったが、水の中に手を入れてかき回したり、水がこぼれるとおたまじゃくしも一緒にこぼれることで大騒ぎになる。それでも触れることができない。どこを持ってよいか、力加減もわからず何匹も潰してしまった。そっと摘まんだ方が良く、網を使えば持てるなど毎日おたまじゃくしのお世話をする中で、愛しい気持ちや大切にしたいという気持ちが芽生える。</p>	

52	県西	年長	環境 「小さな命」	<p>昨年度の年長児からメダカのお世話を引き継いだ子どもたち。当番の仕事のひとつに「メダカ当番」をつくり、興味をもって餌やりや観察を行っていた。ある日、メダカ当番の子どもが、メダカのお腹に透明の小さな丸いものがくっついているのを見つけた。「メダカのお腹に何かついてる！」「これって卵じゃない？」みんなでメダカの図鑑を見てみると、やはり卵だということがわかった。小さな卵をマイクロスコープで見ると、肉眼では見えなかったが、中に黒い目のようなものや背骨のようなものが見えて、子どもたちは興味津々で観察していた。それからしばらく経ったある日、「赤ちゃんが産まれてる！」という声に、子どもたちが一斉に水槽をのぞき込んだ。「どこ？」「ここ！よく見て！」「本当だ！すごくちっちゃいね」「ちっちゃいけど、泳いでる！」小さな小さな命の誕生を、子どもたちは長い間、夢中になって見つめていた。</p>	
53	県西	年中	環境 幼虫の世話	<p>砂場で遊んでいると、砂の中にコガネムシの幼虫がいることを見つけた。「寒いから砂に隠れているんだね。」・「暖かいお部屋に入れてあげよう。」と、クラスで飼うことにした。図鑑で飼育環境を調べ熱心に世話をしてきたが、冬休み明けの様子を確認すると元気がなくなっていた。「お家に連れていってお世話してあげれば良かった。」・「かわいそうなことをしちゃった。」と反省する姿があった。小さな虫にも大切な命があり尊ばなければならないことを学ぶことができた。</p>	